



號九十七第  
 月四年九十和昭  
 行發日五十一  
 行發日五十一  
 錢五部一價定一  
 錢十六(共稅)分年  
 一才 田杉 編人 行印  
 園公谷比日區町越所東  
 社信通盟同 所本發  
 (頁々會版出二第)  
 (八〇〇二二東)

# 皇國必勝の要訣

## 非常時の職責遂行に

### 平素訓練せよ

#### 社長 古野伊之助

## 歐洲の最新情勢展開

最近の歐洲情勢を大觀して非常に強く感ずることは今次の大戦勃發當初において考へられたことと全然違つた方向に向つて歐洲の情勢がどんどん展開されて行くといふことである。

東部戦線の血戦死闘もあまり歩々しい進展をみせない。やかましき騒がれてゐる第二戦線も、現在まだその實現をみせない。ドイツは來るべき米英の歐洲本土上陸作戦によつてこの戦局の大轉換をはからうとして、その主力をこの方面に集中してゐるかのやうに思はれる。

ところが一體この戦争はどう結末がついたとしても、大英帝國の現状維持が可能であるかといふことを考へると非常に興味のあるものがあると思ふ。

盟邦ドイツはその全力を注いで米英の第二戦線結成の努力を粉砕することに死力を盡すことであらうと思はれる。それだけにまた米英もこの企てを輕率にやることは出來ない。

しかしながら徒らに逡巡顧慮して、この戦争努力をやらなかつた

ら、戦争はソ聯の勝利に委すのほかにない事態になつてしまふ。それなら米英が勝つたらどうなるか。勝つてみたところで戦後の全歐洲は疲弊困憊の結果、別段武力を用ひずして充分政治的工作によつて一國民生活の缺乏、不足、不満、疲弊などの悪情勢に乘じて一全歐洲を赤化するに敢て困難でないといつた素地が段々と出來つつある。

**米英の戦争目的消失**

かくのごとくして現にもうロシアの勢力は地中海に、バルカンに西阿にポツポツ浸透しつつあり、英帝國は右するも左するも、過去の威勢を維持することは不可能になつてしまつたのである。

今次の戦争は英國にとつては損得の戦であり、米國にとつては道樂の戦であり、日本にとつては生死の問題であつたと思ふが英國はどつちに轉つても過去の米英帝國の繁榮を再現する望みがなくなつてしまつた。その輿論は正に昏迷状態に陥つてゐるのである。

さうなら一體米國がこの戦争に参加して莫大な物的資力を盡してしまつた効果が何處にあつ

たか。大西洋憲章のごときは一片の空文と化してしまつた。

英國を中心とする歐洲の現状維持によつて米國の安定をはかり、且つさらに、それを足場にして米國の世界制覇の野望を實現し得るといつた、そんな望みが現實のものになるであらうか。徹頭徹尾道樂者の道樂仕事に終つてしまふ情勢が極めて顯著である。かくのごとくしてルーゼヴェルトはこの先果して何年、國內の結束を維持して、この戦争を繼續し得るであらうか。どの方面から考へても米英は完全に戦争目的を消失してしまつてゐる。無名の戦を繼續してゐるのである。

**必勝の秘訣**

ただこの間に立つて明白な戦争目的をもつて世界の東西兩洋から米英の侵略勢力を驅逐して各民族各國家それぞれ自衛自衛の體制を確立することを基礎として、世界の新しい秩序を確立しようとする日本の戦争目的のみが、ひとり嚴然として永久に世界の歴史に新生面を打開するものであるといふことが確信し得るのである。

そこでわれわれ日本國民は、しつかり度胸を決めて、何處までも一億鐵石の團結を固うして、落着きはらつて、敵がいよいよ崩壊し國內輿論の分裂、國內態勢の瓦解を來すまで頑張り抜いてゐるさへすれば、この戦争は我が方のものといふ、はつきりとした見透しをつけて最後まで乗切つて行くこと、

これだけが必勝の秘訣であると私は考へる。

空襲必死だ、防空だ、疎開だといふやうな空騒ぎに夢中になつて右往左往する必要はない。それだけの戦場で一意戦力の増強に邁進すべし。戦力の増強は生産の増強と同意語である。

米國の戦法は何處までも物力にものをいはせて安全第一の用意を十分整へて、人の生命を最少限度の犠牲に止め得るやうな準備が出来なければ積極的行動をとらない。その後も西南太平洋には間斷なく米國の空軍が出没し、機動部隊が蠢動してゐるやうであるが、まだまだそんなことで日本本土の本格的空襲などいふやうなことは思ひもよらぬことである。われわれは眞剣に、この機会に戦力増強に全力を集中しなければならぬ。

**職場に於て努力**

そこでわれわれの同盟において、この目標に向つて全社の力を集中して貰ひたい。内地に留まる國民の努力は兵器の増産と食糧の自給との二點に歸すべきである。その他の用事はもう何もない筈だ。そこでわれわれの努力も、この二點に國民の總力を結集して行くための創意工夫のある限りを盡さなくてはならぬと思ふ。

これから具體的に、その方面に對する企畫を整へ、方針を樹てさうして、しかもこの際、わが社の國家に對して擔當する任務の遂行に力を注ぎたいと考へる。ついでに諸君も、そのつもりでしつかり頭張つて頂きたい。さうしてこの機會に空襲時に対するわれわれの考へ方について一言觸れて置きたいと思ふ。

**國民の志氣を左右**

いま申したやうに現在の太平洋の情勢なり、支那大陸の様様からみて米國の日本本土空襲、本格的日本本土空襲といふものは、まだまだ問題にならないやうに思はれる。

しかしながら米國も國內事情もしくは太平洋において目下出沒してゐる機動部隊の活躍などからみて絕對に東京その他日本本土に空襲を企て得ないなどといふやうな呑氣な考へ方はこちらもあるべきではない。

しかし彼等が血迷つて日本本土空襲といふやうな無謀を敢てする場合に處して、われわれはどういふ風に考へなくてはならぬかといふことを一言附け加へておきたいのである。

**無電同報施設の完備**

同盟はいふまでもなく國家の報道中樞機關である。具體的事實の報道が人心の安定の基礎であり、また志氣昂揚の根柢であることはいふまでもない。一度刻々の事實の報道が杜絶された瞬間に人心は立ちどころに不安状態に陥るのである。またその傳へる事實の報道如何によつて國民の志氣は大いに昂揚され、或は沮喪するのである。

この報道中樞機關を預つてゐるのがわれらの同盟である。そこで現下の重大なる時局に直面して、わが社には對内、對外報道機構を間斷なく充實強化してゐるのである。しかし若しここに米機の本日本本土空襲といふ現實が起つた場合には、全國一億の國民は必ず東京の安危を一番先に氣遣ふことは明かなのである。

この場合に誰が一億國民に向つて「安心せよ、東京は落着きはらつて敵機を粉砕してゐるぞ」といふことの第一聲を告げるか、これはわれわれ同盟以外にはない。このために國內無線電信同報施設を

着々整備しつたのである。全國各地方應所在地には全部同盟の國內電信同報を受信し得る装置が完備してゐる。對外施設に關してはいふまでもない。

同盟が中心になつて國內に對しても、また國外に向つても、全國津々浦々に、世界の隅々にまで如何なる異變に直面するも泰然自若として、首都東京の實情を、皇國日本の方向を遅滞なく告げ得る萬般の準備が立派に整つてゐる。

**平素の訓練が必要**

この機關をわれわれは預つてゐるのである。一億國民のため、皇國日本のため、この重大なる國家の中樞機關を保管し、これを運営し、これを活用して行く任務はわれわれの双肩にかかつてゐる。

全東京が如何なる不安状態に、如何なる混亂状態に假に陥つたとしても、われわれ同盟は最後の瞬間まで落着きすまして、如何なる異變に對しても身を挺して全國民の安定と志氣の昂揚に死力を盡さなければならぬ。

どうかそのつもりで慌て騒ぐこともさらになが、萬一東京空襲といふやうな事態が起つた場合には、何物を捨てておいても皆それぞれの職場に駆け集つて、職責を遂行して頂きたい。そのときに如何なる指示をし、如何なる應急措置を講ずるかなどについては萬全の準備を整へてゐるのである。

故に諸君はそれぞれ自分の受持つ部署において、平日と異なることなき態度をもつて、沈着冷靜、その職責を果して行くといふことに萬端漏なき平素の準備を整へておいて頂きたい。

これだけを一言この機會に附け加へて今日のお話を終ります。(昭和十九年四月八日本社大詔率 戴式訓示)

第二十八回理事會開催

新年度收支豫算案その他可決

同盟第二十八回理事會は三月二十四日午後二時二十五分別館會議室において開會、高石理事長議長席につき第一、第二、第三議案を順次上程、可決承認し、さらに三件の諒解あり、最後に協議事項を可決承認して午後四時三十分閉會した。

可決承認事項の主な點を摘記すると左のごとくである。
一、第一號議案(昭和十九年度收支豫算の件)
二、第二號議案(役員他職兼務の件)
三、第三號議案(諸般の報告)
(イ) 社員新聞社異動(現在社員

數八十八社三協會)
(ロ) 理事監事異動
(ハ) 職制改正
(ニ) 支局新設及び廢止(新設支局成興ほか國內十三、南方四廢止室蘭支局)
(ホ) 郷軍同盟分會設置
(ヘ) 編輯聯絡關係(原稿の活版印刷化、女子職員の採用、無電統制の實施、文字電送機の完成、専用航空機擴充、外電の狀況、戰時調査室の新設、特信の刷新)
四、諒解事項
(イ) 社費月額の件
(ロ) 新聞白損紙の供與に關する件

(ハ) 新聞社と地方支局との協力に關する件
五、協議事項
本社に顧問を置く件



(寫眞は理事會における古野社長の議案説明)

ブロンベン支局開設
佛印ブロンベンに支局を開設、四月一日より業務を開始した。(所在地)
ブロンベンルウ・バズイ一五〇

辞令

マニラ支社長長參事 皆藤 幸藏
レガスピ支局長兼務ヲ命ス
レガスピ支局長 片岡 誠一
マニラ支社編輯主任ヲ命ス
編輯局勤務社員 齋藤 桂助
セブ支局長ヲ命ス(二月四日附各通)
編輯局内經部次長 熊木 啓作
兼編輯局内經部次長 熊木 啓作
通運局長兼副參事 熊木 啓作
編輯局内經部次長 熊木 啓作
解ク編輯局内經部次長兼務ヲ命ス
重工業主任 鈴木 建
編輯局内經部次長 鈴木 建
編輯局内經部次長 鈴木 建
編輯局内經部次長 鈴木 建
編輯局内經部次長 鈴木 建

門司支局長兼下關支局長參事 塚本 數男
仙臺支社長ヲ命ス 水上 勇
小倉支局長兼下關支局長ヲ命ス 伊平田重雄
宮崎支局長參事 伊平田重雄
小倉支局長ヲ命ス 山本藤次郎
京都支局通信主任 山本藤次郎
大津支局長ヲ命ス 田中 新藏
岡山支局勤務社員 田中 新藏
鳥取支局長ヲ命ス 藤谷 悠
大阪支社勤務 藤谷 悠
奈良支局長ヲ命ス 坂本 熊基
福岡支社長勤務社員 坂本 熊基
宮崎支局長ヲ命ス 武田 文男
大阪支社經濟部内經主任 武田 文男
編輯局勤務社員 武田 文男

華中總局總務部 白坂 正男
經理主任參事(三月十三日附)
總務局勤務參事 麻生 林策
休職ヲ命ス(三月二十二日附)
華北總局勤務社員 大木武次郎
聯絡局勤務ヲ命ス(二月一日附)
京城支社同 松田 喬
編輯局勤務ヲ命ス(二月四日附)
海外局勤務ヲ命ス(二月十日附)
戰時調査室同 加藤 長雄
經濟局勤務ヲ命ス(二月廿一日附)
同 村上 正好
經濟局勤務ヲ命ス(二月廿六日附)
聯絡局同 鹽谷 作美
華北總局勤務ヲ命ス
同准社員 高柳 淳雄
華南總局勤務ヲ命ス 小林八郎
マニラ支社勤務社員 高橋 英美
聯絡局勤務ヲ命ス 三宅 敬
同社員 渡邊 公身
マニラ支社勤務ヲ命ス(二月二十八日附各通)
經濟局同 佐藤 一雄
臺北支社勤務ヲ命ス(二月二十九日附)
華北總局同 小田島房志
中華總社勤務ヲ命ス 高井 眞澄
橫濱支局勤務准社員 小山 健
聯絡局勤務ヲ命ス
聯絡局同 高井 眞澄
華北總局勤務ヲ命ス(三月一日附各通)
編輯局勤務社員 寶達 守一
靜岡支局勤務ヲ命ス
華北總局同 龜井忠三郎
華中總局同 兼村 讓
聯絡局勤務ヲ命ス(三月七日附各通)
經濟局同 安本 永樂
京城支社勤務ヲ命ス(三月八日附)
聯絡局同 捧 榮一郎
京城支社勤務ヲ命ス(三月十日附)
華北總局同 菊地 四郎
中華總社勤務ヲ命ス 山岡 孝光
華北總局勤務ヲ命ス
聯絡局勤務社員 青木 主雄
マカッサル支社勤務ヲ命ス

ボシヤナク支局同 富田俊雄
スラバヤ支局勤務ヲ命ス
南方總社同 前川徳之助
磐谷支局勤務ヲ命ス 山田 幸吉
ブリチンギ支局勤務ヲ命ス
メダン支局勤務ヲ命ス(三月十四日附各通)
天津支局同 田中 一夫
華中總局勤務ヲ命ス
大阪支社同 住谷 新市
天津支局勤務ヲ命ス 林 六郎
編輯局勤務准社員 林 六郎
前橋支局勤務ヲ命ス(三月十五日附各通)
同 二宮 博
廣島支局勤務ヲ命ス(三月十七日附)
華北總局勤務社員 鈴木 安子
中華總社勤務ヲ命ス 野村博隆
大阪支社勤務准社員 野村博隆
德島支局勤務ヲ命ス(三月二十四日附各通)
編輯局同 山縣キミ子
水戸支局勤務ヲ命ス(三月十三日附)
社員ヲ命ス伯林支局勤務ヲ命ス(二月一日附)
編輯局勤務社員試用 武井武夫
經濟局同 古林 萬樹
旭川支局同 木村 武雄
關東支社同 山本三四男
花蓮港支局同 中村 一秀
聯絡局勤務 青木 主雄
准社員試用
編輯局同 廣田 敏子
同 長林 泰子
同 重住智恵子
同 智識シツ子
同 古山 節子
同 關山貴代子
同 渡邊 愛子
同 濱村 義男
同 古屋かな枝
同 阪野 郁子
同 山本 保江
同 坂東みよ子
(次頁へ續く)

大阪支社勤務社員 百尾 君子  
 威興支局同 平沼 俊光  
 同 同 三田 亞夫  
 同 同 勢田 家本  
 同 同 松本彌太郎  
 同 同 長井美代子  
 同 同 田井 勝巳  
 同 同 關貢支社同 田井 勝巳  
 同 同 准社員ヲ命ス(三月一日附各通)  
 同 同 聯絡局同 住吉智恵子  
 同 同 中本 昌子  
 同 同 佐藤萬壽子  
 同 同 同 香西 昌子  
 同 同 准社員ヲ命ス(四月一日附各通)  
 同 同 滿洲國通信社々員 潘 鴻齋 籍  
 同 同 馬 岐 嶺  
 同 同 海外局々事務ヲ囑託ス(十二月一日附各通)  
 同 同 日附各通)  
 同 同 華中總局ノ事務ヲ囑託ス  
 同 同 岩佐 吉兼  
 同 同 編輯局ノ事務ヲ囑託ス(三月三日附)  
 同 同 編輯局勤務准社員 笹原トシ子  
 同 同 依願解職(十一月三十日附)  
 同 同 下關支局勤務准社員 榊 憲二  
 同 同 依願解職(一月二十五日附)  
 同 同 編輯局勤務准社員 清水喜代子  
 同 同 依願解職(一月三十一日附)  
 同 同 大阪支社同 井上 房江  
 同 同 依願解職(二月十二日附)  
 同 同 經濟局同 立花 毅  
 同 同 高雄支局同 星野 博義  
 同 同 依願解職(二月十五日附各通)  
 同 同 札幌支社同 澁谷 澄子  
 同 同 依願解職(二月十六日附)  
 同 同 津支社同 伊東 正道  
 同 同 神戶支局同 岡田富美子  
 同 同 依願解職(二月二十日附各通)  
 同 同 柳井 露子  
 同 同 依願解職(二月二十一日附)  
 同 同 依願解職(二月二十四日附)

總務局同 大本 久子  
 大阪支社同 梅津 榮治  
 依願解職(二月二十五日附各通)  
 經濟局同 山本はつゑ  
 依願解職(二月二十六日附)  
 廣島支局同 佐武三枝子  
 依願解職(二月二十八日附)  
 京城支社勤務准社員 李 未 愛  
 編輯局勤務准社員 平山 榮子  
 同 同 加藤 鳩子  
 大阪支社同 福田瑞璃子  
 中華總局同 鐘 玉 嬌  
 華中總局同 徐世 玉  
 徐州支局同 新谷 清志  
 依願解職(二月二十九日附各通)  
 長野支局同 吉村 きよ  
 依願解職(三月二日附)  
 大阪支社同 富士川朝子  
 聯絡局同 車田 すみ  
 同 同 内海たか子  
 經濟局同 金子 文子  
 依願解職(三月五日附各通)  
 廣島支局勤務准社員 江藤 隆夫  
 依願解職(三月六日附)  
 大阪支社勤務准社員 岸田幸子  
 依願解職(三月七日附)  
 同 同 橋本 政子  
 依願解職(三月十日附)  
 總務局同 高橋 正子  
 華中總局同 飯塚 雪子  
 依願解職(三月十一日附各通)  
 編輯局同 中林 叔子  
 同 同 平田木久子  
 依願解職(三月十三日附各通)  
 同 同 長林 泰子  
 依願解職(三月十三日附)  
 同社員 榊 秀雄  
 總務局勤務准社員 伊藤 キエ  
 金澤支局同 三納 信子  
 依願解職(三月十四日附各通)  
 總務局勤務准社員 山田良太郎  
 岡山支局勤務准社員 服部仁子  
 編輯局同 新田 童子  
 依願解職(三月十五日附各通)  
 大阪支社勤務准社員 佐藤キヨ子  
 仙臺支社同 中村 光代  
 釜山支局勤務准社員 西村武雄  
 依願解職(三月十八日附各通)  
 編輯局同 白熊 福子  
 依願解職(三月二十五日附)

南方總社勤務社員 長 武男  
 編輯局同 濱田 秀雄  
 海外局同 高田 丸  
 編輯局勤務准社員 稻垣 正夫  
 依願解職(三月三十一日附各通)  
 海外局囑託 田島 薫治  
 依願解職(二月二十九日附)  
 華中總局勤務准社員 安井 徹  
 依願解職(三月三十一日附)  
 華北總局同 松尾 啓介  
 依願解職(二月十一日附)  
 華中總局同 番野 直治  
 解職(二月二十九日附)  
 南方總社同 宮内 くに  
 死亡(二月三十一日)  
 門司支局勤務准社員 久原一馬  
 死亡(三月三日)  
 聯絡局同 新藤利太郎  
 死亡(三月十日)

今泉 德造(青森支局) 二子  
 工藤 男二(同) 三男  
 宮末 春吉(門司支局) 二女  
 末次 遜(同) 長男  
 勝目 晃也(福岡支社) 長女  
 安藤 肇(同) 同  
 大西保太郎(大分支局) 同  
 鶴田 左門(釜山支局) 二女  
 國澤 秀穂(高知支局) 四男  
 △應召・入營・應徵  
 吉武 雪生(編輯局)  
 森田 輝三(聯絡局)  
 中野 輝三(聯絡局)  
 小村 昇平(總務局)  
 田崎 花馬(海外局)  
 要 保太郎(聯絡局)  
 永山 公明(戰時調査室)  
 佐々木 公庸(總務局)  
 松岡 詔(編輯局)  
 桶川 廣正(聯絡局)  
 渡邊清次郎(函館支局)  
 林 豊(八小倉支局)  
 柏村 進(京都支局)  
 石井 正豊(京都支局)  
 三輪 春雄(富山支局)  
 杉本 澄男(京城支社)  
 丹羽 逸三(岡山支局)  
 △見舞  
 大久保サキ(編輯局) 病氣  
 中林 叔子(同) 同  
 酒井ふじ子(經濟局) 同  
 岩崎 正雄(編輯局) 遭難  
 松本 重治(常務理事) 病氣  
 瀨川伊和男(總務局) 同  
 佐藤 好也(仙臺支局) 同  
 水谷安左衛門(名古屋支社) 同  
 乙部 守淳(甲府支局) 同  
 小久保丈夫(華南總局) 同  
 中尾日出輝(熊本支局) 同  
 沖本 薫(福岡支社) 同  
 坂本 熊基(同) 同  
 金村 相化(釜山支局) 同  
 浦岡偉太郎(南京支局) 火災  
 白石 覺(同) 同  
 關口 武夫(同) 同  
 福本 浩一(同) 病氣  
 源關 正壽(同) 火災  
 福本 浩一(同) 夫人病氣  
 梅原 醇一(經濟局) 長女病氣  
 前 農夫(總務局) 病氣

大場 健次(編輯局) 同  
 八百 嘉忠(戰時調査室) 同  
 △弔慰  
 半谷 高雄(編輯局) 母死亡  
 加藤 みや(同) 死亡  
 岸江 憲一(同) 夫人同  
 佐藤 剛(海外局) 母同  
 板垣 剛(經濟局) 實父同  
 永松 紀子(小倉支局) 實母同  
 森山 朝男(神戸支局) 實母同  
 衛藤 文一(漢口支局) 父同  
 戸來 秀陸(編輯局) 死亡  
 △退社  
 井下 悦二(戰時調査室)  
 中野 日正子(編輯局)  
 松原 正雄(聯絡局)  
 大和 久遠(經濟局)  
 藤川 伴雄(名古屋支社)  
 澤田せつ子(同)  
 松尾 幸次(華南總局)  
 太田美智子(神戸支局)  
 合計(件數) 七十九  
 金額 六、一八〇圓

大嶽玄谿氏戰死  
 本社々會部勤務大嶽玄谿氏は海軍報道班員として南方戰線に從軍した。昨年一月二十三日セレベス方面で壯烈な戰死を遂げた旨公表された。氏は愛知縣出身、上智大學新聞科を卒業後昭和十五年國通に入社し出向社員として我が社々會部で活躍奮闘してゐた。この間現役兵として大東亞戰爭勃發後佛印に進駐し、次いでポルネオ、スマトラ職定作戰に従軍し偉功を樹てた。遺族は夫人くに子さんと長男恭司君(六歳)がある。享年二十八。

# 編輯局の今日此の頃

## 總員戰鬪配置全し

### 部信外

#### 敵情偵察に 晝夜敢闘

夕刊がなくなつて新聞紙面の外電掲載量は、いよいよ少くなつた。従來は同盟以外に豊富確實な外國情報がないとの建前から掲載量と關係なく、多いときは八十本近くも出稿してゐたが、夕刊廢止を機會に斷然ポニー・サーヴイス(仔馬送信)に改めた。件數で半分、語數分量で五分の一見當に削減してしまつたわけだ。

出稿量が減つても敵情偵察の國家的使命に變りなく、一日歐文で無慮十萬語の外電が晝夜の別なくドンドンとデスクに入つてくる。眞夜中でも大事件は要所に聯絡せねばならぬのでアンテナは四六時中張り切つてゐる。報道戰線においてロイターやA・Pに一步もひけをとつてゐないから御安心願ひたい。

### 部東亞

#### 現地の奮迅に 直ちに呼應

現地諸兄の日夜を分たぬ奮闘のお蔭で東亞電報は日ともにも充實してゆく。地方紙はもとより中央紙も戦時版も同盟記事が壓倒的に多くなつた感じが深い。放送局ニュースや、わが社の大陸、海外向け放送において東亞電報の占める比重は今更にいふまでもない。それだけに東亞關係記者に課せられた責任は重く、またや甲斐があるわけである。一日一萬語に上る東亞電報、一日四、五十本に達

### 部經政

#### 團結、協力 人手不足を克服

定員四十六名の木鐸が各官廳、會社、銀行、諸團體の俱樂部などに手くすね引くこととなつてはゐるが、現在のところ實際に出動してゐるのは三十五名、その上に應召、轉勤でデスクも一時に五人も減り、殘留者が手不足になつて樂になつたらうなどといふものもあるが、事實はさにあらず、何時どんなニュースが出るか、去る三月二十三日の大本營發表のごときその一例であつた。

縮切り時間のはつきりしてゐる新聞社の記者と、同盟の記者とははニュースの時間的觀點に當然相違がある。いづれにせよ、我が部は人手不足を團結協力によつて克服、分會の軍事訓練や多摩川の鍊成農場の開拓などの實施にも敢て他部に劣らざる好成績を擧げてゐると自讃してゐる次第である。

### 部會社

#### 論議より實行 減員に屈せず

長期病缺者を除き、春

とともに健康を害してゐたものも漸次恢復、部全體は元氣横溢してゐる。最近報道班員として田中功高橋義樹兩君を前線へ送り、岡岡陸軍、黒川宮内、關口運通、高橋國通出向の四名が勇躍應召した。部員の數は減つても殘留部隊が二倍、三倍の熱と馬力で兵力量を補ふ申合せをした。

仕事の内容は毎週の週間記録にその都度書くから、ここに改めて報告する案件はない。論議よりも實行を看板として進みたい。

### 部文化

#### 映畫、藝能版は 活版刷一本槍

思想戰の彈丸としての新聞、ラジオとともに映畫はその最大武器である。映畫と新聞を結合文化面への指導に、報道に文化部は雄々しく挺身しつゝあつたが新聞紙面の縮少はこの使命を十分發揮するを許さない感みがある。

しかし他方活版刷とプリントの映畫・藝能専門時事通信をもつて官民協同の機關紙たらしめ、政府・外廓團體・映畫製作會社・興業者を結合上意下達、下情上通の唯一の機關として任務遂行の重責に馬力をかけてゐた。

四月一日から活版印刷による映畫・藝能版一本槍の實現をみ、内地はもちろんだが、南方の新聞社に、業者は、なくてはならぬ存在を誇示してゐる。かくて文化部の責任はますます重大化した。出征、應徵者の續出で手不足を來し非文化的活動を續け苦闘してゐる

### 部整理

#### 人手不足と 質的苦心

この一ヶ月ぐらゐの間に整理部も應召、入營、轉勤などで相當人員が減つた。整理、校正

タイプを含む大世帯だから、それらを併せると随分減つてゐるが、量の不足をいま急に質で補ふことは出来ない相談だ。結局減つたら減つたまゝの陣容で、熱と努力でやつてゆくより仕方がない。

しかし夕刊の廢止、縮切り時間の繰上げなどで、實質的には多少時間的餘裕が生じたことも事實である。夕刊がなくなつただけでも可なりの相違だ。

もつともそれだけ原稿整理がむづかしくなつたことも事實だ。紙面の狹隘、人的資源の不足、特に各支社局の人手不足などを考へると、一方において量質ともに新聞社側の要求を最大級に充しながらしかも人的隘路による過勞を防ぐには、いきほひ量的縮減をはかる以外にない。

したがつて、よい記事を集約的に、この方針は従來とも變りはないのだが、この際これをさらに徹底強化して、各方面の要望を十分充たし、併せて整理部の仕事の能率をますます發揮して行きたいと考へてゐる。

「三十分であけて下さい」、ものすごい老大な原稿にも發刺として右、左へと分け合つて、時間前に打ちあげたときの嬉しさ……、そのときの氣持ちは一機でも、一機でも多く造る産業戰士の心構へといささかの變りもない。

わたくしはちも産報女子隊の一員としてキリリとしたモンペ、防空服に身をかため、職域戰鬪配置について、男子に變り全員一致して責任を完する覺悟で張り切つてゐる。

校正班 春が來た。朱筆を握る感觸も快い。しかしカットと眼をみひらいて校正のアンダーシートに眼光を注ぐとき、そこは水のごとき冷徹の深淵だ。

タイプから送られるステンジルと原稿を讀み合わせるだけなら校正はたやすい。だが私どもの探求はもつと奥にある。日ごとに流れ、發展してやまぬ報道の世界にあつてこのことの完遂を目指すとき、校正の仕事には並々ならぬ實力の包藏と自信をもつてやる果敢さを要求される。

内地はもとより南北の第一線から、遠く盟邦、中立國の要地に奮闘する同盟同志が精魂を打ち込んで書上げた努力の結晶が、いよいよ美しく磨かれ、全きものとなつて、讀む人の前に送られるのも、またこの珠玉の勞作をぶち壊してしまふのも校正である。そこに最後の關所を守るもの責任の重大さがある。この半年の間に各部に先立つて目立つて女子進出をみたのも校正である。周囲の甘い見方や危懼觀に實力で答ふるには、ただ誠實と情熱に満ちた仕事への歩みあるのみ。私どもは拵きなく結んで今日も朱筆を握る。

### 部査閲

#### 専門家諸君 相次いで應召

再び獨立して部となり表面整理部から離れた形だが整理部とはきつても切れぬ仲であり、部長は田中整理部長の兼務であるエキスパート相次いで應召し、目下陣容再建中だが今月中には部ら

しく整備したいものである。最近の趨勢として檢閲部面が著しく擴大され、したがつて仕事の増量を來し、晝夜の別なく社内連絡に、對外折衝に奮闘してゐる。この機會に各部にお願ひしたいことは原稿が不明瞭だと檢閲處理が遅れるからはずり書いて貰ひたいといふことである。

### 部方地

#### 滿洲國を含む 廣大な受持

東京都を除く二府四十三縣一道的内地全土はもとより臺灣、朝鮮、關東州、滿洲國に關する取材は地方部の受持ち區域今これを大東亞全域に擴大強化すべく着々構想を練つてゐる。かなれば地方部の名稱も「大東亞部」に改められねばなるまいと部員連の鼻息は荒い。

部員は一昨年創設當時今の通信部に所屬すべきものを合せ約三十名に上つたが、應召、從軍、支社局への轉出を他の異動で、當時の半數以下、これに先頃の職制改革で舊特信部の人々が合流したがその特信も手不足だ。

特信 特信は本年一月一日社の職制改革に當り地方部に統合されたが、仕事の内容には變りなく従來通りの通信を發行してゐる。御多分にもれず特信も人手不足、現在所屬社員は僅か五名、昨年頃からみれば正に半減の有様、しかし部員の努力次第では人手不足を補ふことが出來ようと精進をつづけてゐる。

特信といふ特殊使命をもつ通信だけに、その企畫取材には常に積極的でなければならず、また各部の協力支援を得ねばならない。現在でも各部、各支局の協力を得てゐるが、より一層の協力を望んでゐる。

寫眞部

疎開用に

燒増〇萬

入り替り立ち替り海軍報道班、かと思ふと編輯局長から命令一〇〇〇方面へ三名、××方面へ二名といふ工合に従軍させねばならず、その上に應召、應徴と年がら年中フウフウ言つてゐるが今更驚きもしない。

夕刊はなくなつても、雑誌が減つても、仕事が楽になりはせぬ。寫眞部といふのは因果な部で、前線が忙しくても國內が多忙でも、政治部の活躍時、社會部が活躍に動くとき、すべて關係してゐるので何時でも貧乏暇なしだ。

目下は萬一に備へて資料寫眞を疎開させるため約三千枚(各五枚計一萬五千枚)の燒増しを始めて、これを四月中に終へて、その次には重要ニュース寫眞の燒増を作り、疎開保存する豫定で馬力をかけてゐる。

資料班

岩永家寄贈書と松本文庫

資料班は創業滿四年を迎へた。新聞記事の切抜き分類保存、各種調査カードへの記載、圖書の充實が着々と行はれた結果、今日では如何なる問合せ、資料請求に對しても大抵満足な回答をなし得るやうになつた。

最近の利用度数は一日平均二十數件に達するが、資料班が現有する資料と組織、規模においては、むしろ過少の感みがある。本社はじめ各支社局の活潑な註文を望む次第である。

世界重要日誌(旬刊)、官廳及び團體職員録、同盟資料(新着圖書紹介)、同盟地圖(最近刊は縮印國境)など當班作製の刊行物はよく

利用されてゐるが、直接來室されて圖書、カード類を閲覧されるのも歓迎してゐる。古典のほか新刊書の主なものはすべて購入してあるし、最近では

對外思想戦は攻勢一本槍

突撃する海外局

企畫部

思想戦の參謀本部

本社の文字通り「夏は蒸され、冬は冷される」位置に「企畫部」といふ標識が立つてゐる。海外局目録が同盟では看板が新しい方だが、企畫部にいたつては全く新しく新店の悲しさ、他所様並みに催物でも計畫するところだらうなどと軽くあしらはれる場合が往々にしてある。

しかし部同人は手前味噌ながら「對外思想戦の參謀本部」といつた氣持ちで張り切つて「紙の彈丸」をせつせと作つてゐる。即ち企畫部の仕事を一口にいへば社内各局部特に編輯局との連絡、關係官廳との折衝など、放送協會、國際局との打合せなどによつて對外思想戦の計畫を樹てることである。毎朝九時半から企畫會議を開く、關係官廳との連絡委員會にも毎日出席する。參謀本部、軍令部情報局、外務省及び放送協會との各直通電話によつて、これらの機關と連絡を保ち、紙の彈丸が不發にはならぬやう鋭意努力してゐるのである。

故岩永前社長と松本常務理事の御藏書各數百部の寄贈を受けた。松本常務寄贈書は松本文庫として別置し、近く公開することとなつてゐる。

碎するため、或は大連、南方、中立諸國その他敵國に働きかけるため隨時必要に應じて企畫原稿なる特製の彈丸も製造される。かうした原稿は一般國內紙に現れぬが、思想戦ではなかなか侮れぬ役割を果してゐる。しかしてこれが材料には大戦果の發表を扱ふかと思ふと新聞、雑誌その他から蚤取眼で探し出したきた片々たる硬軟雜多の豆ニュースのごときまであるのである。

大陸部

大車輪でローマ字同報

大陸部が擔當してゐるのローマ字電信同報は對象が北支蒙疆から中支、南支まで南方全域とひろがつてゐる。お得意さんもお前線の勇士から在留邦人、大東亞意識に目覺めた現地人、いまだに敵性の殘滓を残してゐるもの、この重慶や米國の戦時情報局までがこれを傍受してゐるといふ状態で、なかなか單純でない。したがつて同報ニュースを扱ふにも報道、啓蒙、對敵宣傳の兼ね合ひを狙つて、一つ一つの記事の性格をみて編輯せねばならず、そこに朱筆をあつかふもの苦心もある。

歐洲戰局の不味なニュースや、南方各地の敵機襲撃記事、または敵側の宣傳的な發表などで現地新聞に載せ、一般に知らせるのもどるかと思はれるものは毎日一定時(支社局長用)ニュースとして一括同報したり、戦つ統後を心配する前線勇士および邦人向きに、これも毎日一定時(郷土だより)に五、六本を編輯して同報してゐる以上一般ニュース同報のほか前線支局向けの要約同報も一日四回行ふ。また艦船向けの片假名同報も引受けてゐる。

これだけの大仕事を部長以下八名の編輯陣が機械化部隊(タイプ)を奮勵して朝の七時から夜の十時半まで、三十分置き同報業務を切廻してゐるのである。なほ目下同報してゐる語數は一日總計約八千語に上り、一般ニュース同報だけで六千語前後、ベタ組にして新聞約一頁半分を送つてゐる。

このやうに立場なり、性格なりをそれぞれ異なる相手と相手としてゐるので、編輯が非常に複雑となり、絶えず苦心と工夫が要請される。しかし樵夫山を見ずといはれる。第三者の冷靜な批評と熱烈な支援を切望する。

華文部

華文電信同報と宣傳綱領

一昨年五月新設された華文部は間もなく二誕生を迎へようとしてゐる。當初は大平編輯局長の部長兼任のもとに日本人部員は大星、平田の二人、華人部員は華中、華北から招聘した十三人の半素人、素人併せて十六人の同志で日本で始めての華文電信同報を開始した。

その頃は語數も一日五千から六千がせいといつぱりであつた。誰もが馴れない仕事のため能率は擧らず、能率の擧がぬところは熱で補へど日華を問はず殆ど休日もとらないで仕事を進めた。デスクの上では日華の間、華人同志の間でよく議論が囀はされたものであつた。日本の大藏省は財政部と譯すべきだ、いや大藏省は大藏省のままよ。何故なら中國の財政部は日本でも財政部のま

ま傳つてゐるではないか、なる程といつたやうな、こんな初歩的なものから華文部の仕事が進められてきた。

その後仕事が進められていくとも日本にも殖え、中國人も多くなり、現在では日本人六名、中國人十四名を數へ(近く國府宣傳部特派新聞留學生四名を迎へようとしてゐる)異色として國通派遣の二名も同志に加へてゐる當初の日華共同作業場から日華滿三國の東亞輻輳の縮圖示現にまで躍進した。

歐米部

新聞の締切り繰上げ無關係

このやうに立場なり、性格なりをそれぞれ異なる相手と相手としてゐるので、編輯が非常に複雑となり、絶えず苦心と工夫が要請される。しかし樵夫山を見ずといはれる。第三者の冷靜な批評と熱烈な支援を切望する。

戦時調査室はどんな仕事をしてゐるか。期待され、また興味を寄せられてゐるが、仕事の性質上いままその業績の全貌を、ここに語ることを得ないのは甚だ残念とする。世の調査室なるものが、調査倒れに終る例は必ずしも乏しくないその主なる原因としては、その政治性の缺如にあるといつてよからう。戦時調査室は、この點無類の政治力を備へてゐるといふことは素直にお傳へ出来る。

へることもない。應召、轉出、退社等十人餘、休養七名の大穴があき、これを埋合せるべく新入り七名は吊合ひがとれぬ。部員數は現在五十四名であるが長期休養以外に病缺も相當多い。どうしてかうも若いものは身體が弱いのだらうと老人組が嘆いてゐる。部の主力は何といつても三十臺の若者が推進すべきだが――

編輯局の方は締切り繰上げとか何とか耳より話であるが、歐米部は打止め〇二〇〇(米洲)、打始め〇七〇〇(スペイン語、南米、英語、歐洲)で、その間たつた五時間、そこはうまくやつてゐるもの忙しいことには變りない。

戦時調査室の姿

後方補給は萬全

戦時調査室が出来てから正味二ヶ月を経過した。この間大いに仕事を相當の實績を擧げてきたことを斷言する。その片鱗は「敵情」にも一部掲載された通りである。戦時調査室はどんな仕事をしてゐるか。期待され、また興味を寄せられてゐるが、仕事の性質上いままその業績の全貌を、ここに語ることを得ないのは甚だ残念とする。世の調査室なるものが、調査倒れに終る例は必ずしも乏しくないその主なる原因としては、その政治性の缺如にあるといつてよからう。戦時調査室は、この點無類の政治力を備へてゐるといふことは素直にお傳へ出来る。

先頃も倉田南方部長は要務を帯びて轉出したが、今度また西村内閣部長が懇望されて新潟日報社取締役編輯局長として榮轉された。南方部長の後任には長島參事就任内閣部長も人選決定、兩者共にその敏腕を認められてゐるだけに大いに期待される。

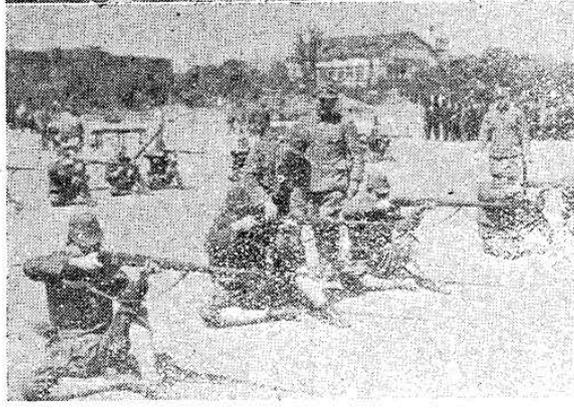
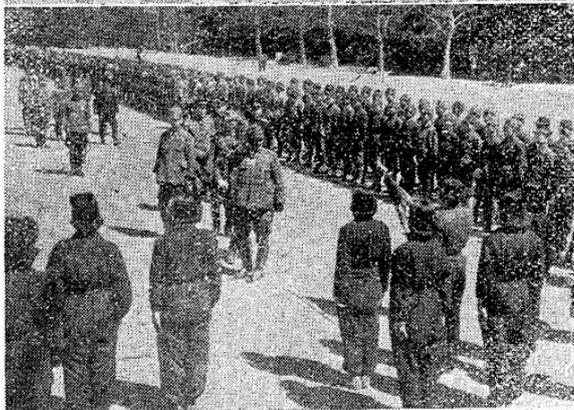
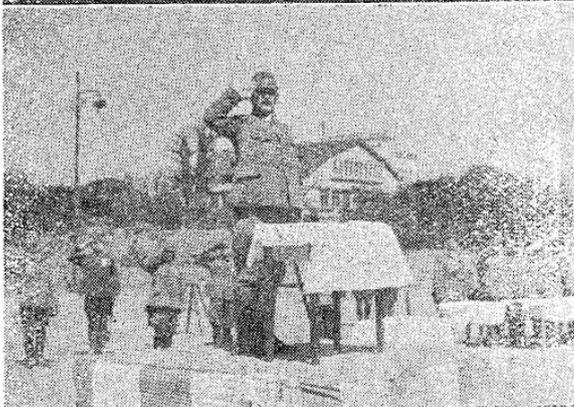
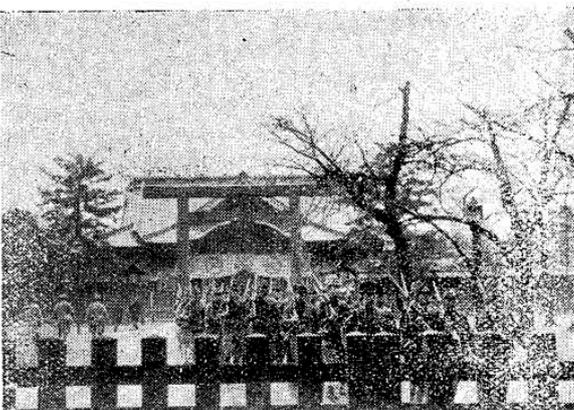
# 郷軍同盟分會

## 發會式並に査閲

三月二十六日、夜來の春雨名残りなく霽れたつた日本晴れ、同盟分會將校以下五百餘名は武裝も凛々しく日比谷公園廣場に整列をすれば、曉々たる「海征かば」の曲に迎へられて支部長村上少將は幕僚を従へて臨場、東條首相揮毫の分會旗一入朝日に映えて勇ましくも華やかな發會式は始つた。

先づ分會長の軍刀一閃、「君が代」の喇叭響きわたつて全員宮城遙拜、續いて陸海軍に賜はりたる勅諭および勅語捧讀の後、幹部中告を了る。次いで分會長、聯合分會長並に支部長の訓辭あり、古野名譽顧問は設立者として挨拶し、ここに榮えある分會發會式を滞りなく終了した。

發會式に引續き直ちに支部長査閲に移る。即ち支部長査閲官とな



### 東京市中 行軍を舉行

報産・軍郷

三月五日以來日曜毎に演練を續けてきた郷軍同盟分會は二十六日良好なる成績をもつて査閲を了したが、息つく間もなくその次の休日たる四月二日、春といへ肌寒く霰混りの雨を冒して東京市中行軍を遂行した。この日午前七時半、武裝して日比谷公園を出發、二重橋に出て宮城を遙拜した隊列は柳芽くむお濼端を九段に向ひ靖國神社を參拜、舊東郷邸を參觀して明治神宮外苑に至り、ここで産報本隊員若干名を合流せしめて繪畫館前より日本青年會前を経て東郷神社に詣つ。かくて神宮橋で小休止し、遅れて東郷神社に參拜した産報女子隊および本隊員をさらに合流、玉砂利を靴音勇しく踏みしめて明治神宮社前に恭々しく拜禮を捧ぐ。寶物館横休憩所において大休止、持參の辨當を喫し、再び統をととり、ここで社長の訓示を受け、裏參道より神宮外苑に行進、聯隊區司令部支關前に立寄り整列する。かくて圖らずも支部長閣下は親しく一行の面前に現はれ、親しく激勵の辭を與へられ、一同感激した。次いで舊乃木邸を參觀し、乃木神社に參拜し、分會々歌高らかに歌ひつつ溜池、虎の門を通過し、午後二時日比谷公園廣場に歸り解散した。

この行軍に當り古野社長および鷹野常務は雨中もいとほず郷軍とともに全行程を行進されたことは行軍の士氣を大いに振起させるものがあつた。

【富貴説明】(上より) 郷軍分會靖國神社參拜、その下関兵中の村上少將と同盟分會

### 我等に

#### 社歌を

總務局

瀬川伊和男

歌と服裝が人間の感情を支配することは大である。感情は歌詞とを聞き及んだ。もつともこれを委

リズムに平行する。吾人が「君が代」を奉唱し、「海征かば」を高唱するときに、嚴肅なる尊皇殉國の理念が精神を支配し、卑俗低劣なザレ歌を吟めばデカダン氣分を生じ唾棄すべき慾望も起る。

雄渾にして高尚、嚴肅にして詩彩豊かな歌詞と、勇壯にして朗朗なるリズムを内容とする我等の同盟社歌を元氣いっぱい歌ふとき、思想戰士の責任感を昂揚し、同盟精神を鼓舞すること幾何ぞや。社歌制定の緊要性を痛感する所以。

私はわが社の第一回支社局長會議以來機會ある毎に社歌制定論を強調してきたが、未だ實現をみぬのは遺憾に堪へない。しかし首腦部もその必要を認められ、汎く職員から公募されたが、優秀なるものが得られなかつたのと、時恰も大東亞戰爭の勃發で世界情勢の激變といふ派生的事由もあり、したがつて歌詞の内容にこれを織込むとすれば出直さねばならぬ——とあつて一應白紙に還り、舊臘某專門大家に作詞を委嘱したとのこと

歌と服裝が人間の感情を支配することは大である。感情は歌詞とを聞き及んだ。もつともこれを委

囑された當の詩伯も、同盟の職責の廣範圍にして、重大性を考へるべく、なかなか適當な佳詞名句も浮ばぬとあつて、さらに想を練り苦吟の態と開いてゐる。

或はいふ、「大東亞戰爭中に急いで作つても戰爭が濟めば世界の情勢が變るから社頭の歌詞もまた變へねばならぬ」と。またいふ「日本人は君が代、海征かばを歌へばよい、何も慌てて社歌を作るには當るまい」と。

#### 椰子の臭ひ

日置 尚 孝

黒い肌、唇の紅い  
跣足の女  
お前は椰子の臭ひ

やさしい微笑に  
つゝまじいお辭儀に  
明るい喜悅に

南の情熱は  
椰子の臭ひ

明るい  
やさしい  
椰子の臭ひ

(マカツナルにて詠める)

敢て異を樹てて快を叫ばんとするものではないが、私はさうは考へぬ。戰爭中ならこそ尙更それによさしい詞章の社歌が欲しい。

頃者總務局では朝の執務前全員集合して朝禮をやつてはとの話が持つてゐる。誠に結構なことであるが、さうなるといよいよ社歌が欲しい。この場合郷軍分會々歌を歌ふわけにもゆくまい。是非社歌を齊唱したい。

執務即戰闘、戰闘準備の行事において同盟精神の高潮による能率も幾倍化されることか。社歌制定の急速化を再提唱すること以上。